東洋陶磁学会第 42 回大会
研究発表要旨

「“陶磁の道”研究半世紀の歩みと展望」

平成 26 年 12 月 6・7 日

千代田区立日比谷図書文化館

＜記念講演＞

「陶磁の道」 …… 佐々木 達夫

＜研究発表＞

三上次男先生と日本貿易陶磁研究会 …… 村 上 勇

有楽町一丁目遺跡出土、明暦の大火で罹災した陶磁器群 …… 水 本 和 美

草原の陶磁の道 ―内陸アジアのモンゴル帝国時代の遺跡出土の中国陶磁― …… 弓 場 紀 知

東南アジアの陶磁の道を学ぶ ―1980 年代からの流れ― …… 坂 井 隆

アジアーヨーロッパ間の陶磁器流通研究へのアクセス …… 堀 内 秀 樹

新大陸に向かう東回りの“陶磁の道”の研究成果と最新情報 …… 野 上 建 紀

東アジアにおける水中考古学研究史と近年の沈船調査事例 …… 小 川 光 彦

東 洋 陶 磁 学 会

2014

《記念講演》

「陶磁の道」

佐々木達夫

「陶磁の道」は三上次男が『陶磁の道―東西文明の接点をたずねて―』(1969年、岩波新書)で提唱し、唐代から明代に中国陶磁器を西アジア・北アフリカへ運んだ海の道を指す。

三上は言う。「東から西へ、西から東へ、・・・貿易を通じての両者の結びつきが、中世における各地域の孤立を打ちやぶり、各地域に時代的共通性をもたらす・・・。陶磁はそれの一つの象徴といえる。・・・中世の東西世界に渡された一本の太い陶磁のきずな。・・・東西文化を交流させるかけ橋でもあったが、この海の路をわたくしはしばらく「陶磁の道」と呼ぼう・・・。」

20世紀中頃、中央アジアの古代道は日本でもシルクロードとして知られ、陸のオアシスの道と草原の道が有名だったが、海の道もシルクロードとされた。中国陶磁器を資料とし、陸と海を対比的に捉え、アジアの海の道を三上は「陶磁の道」、三杉隆敏は「海のシルクロード」と1960年代末に名付けた。

中国から陶磁器が大量輸出されたのは唐代で、以前にも海の道はあったが中国陶磁器は運ばれなかった。近世はヨーロッパのアジア進出が頻繁になり、その状態が膨大な文字で記録され、陶磁器を使うより歴史復元に適切となった。陸のシルクロードは名称が定まった。この状況で三上は、中国の陶磁器生産量や生産技術、中国の経済や貿易事情、運輸手段の進歩発展の状態、商業資本の蓄積や活動状況などが、陶磁の道・海上貿易の研究課題とした。受け入れ側の社会に対する影響にも目を向け、模倣製品が中国陶磁器へ影響する技術交流が各地に時代的共通性を生み出したと言う。一国史や地域史を超えた世界史で、当時の東洋史や考古学の学者はそれを東西文化交渉史と言った。最近の東西交流・東西文化交流史である。

三上は遺跡で中国陶磁器を採集したが、海の道の遺跡を自ら発掘するのは1980年代前半のフスタートである。その後は海の道に沿う中世遺跡を日本人も発掘し、具体的で実証的な研究が進む。フスタート発掘は三上、桜井の下で川床が担当し、佐々木が出土中国陶磁器を扱った。その後、紅海の中国陶磁器は川床が調査し、ペルシア湾の中国陶磁器は佐々木が発掘した。ジュルファールでは中国陶磁器と東南アジア、中央アジア、西アジアの陶磁器が層位発掘され、組み合わせの変遷、模倣交流が研究された。

三上は割れて遺跡に散る陶磁器のかけらを愛し、「陶磁の道」を提唱したが、現在は時代・種類・地域が広がる。中世ばかりでなく近世陶磁器も、中国陶磁器ばかりでなく日本や東南アジア陶磁器、ヨーロッパ陶器、イスラーム陶器も、海ばかりでなく陸も、そして流通の研究範囲はユーラシアを越えてアメリカやアフリカまで広がる。「陶磁の道」研究そのものがアジア各地の研究者に広がり、各地域で「陶磁器の生産と流通、使用」の考古学研究に姿を変えている。

《研究発表》

三上次男先生と日本貿易陶磁研究会

村上　勇

日本貿易陶磁研究会は、1979年9月に有志11名を発起人として発足した。9月10日付で三上先

生の個人名で速達が届き、トヨタ財団に申請していた「前近代のアジアにおける陶磁貿易の実態の国際的調査研究」が研究助成を受けることになったので、承諾書に記名捺印して返送するようにというもので、トヨタに諸々の書類を提出する締切が9月21日という念押しまで付いていた。研究会発足に財源的な裏付けもとれ、会は1980年9月に、京都の同志社大学を会場に第1回日本貿易陶磁研究集会を開催し、全国から研究者が集い、実りの多い成果を得ることができた。

会誌である『日本貿易陶磁研究 No.1』に「陶磁器貿易の研究とその意義」という巻頭言を三上先生が書かれ、その中で1979年4月に松江市の島根県立博物館で開催したシンポジウム「15・16世紀を中心とした出土陶磁」に触れ、現代わが国の多数の考古学者が中国陶磁が発見される遺跡の調査をしているが、十分な成果をあげるためには、中国陶磁に関する充分な知識が必要であり、互いの調査結果を持ち寄り、広い視野から出土状況・陶磁器の性質・遺跡と陶磁器の係わりあいなどを相互に比較検討し、それらの種類や年代の決定にあたらなければならない。このような見地からシンポジウムで検討を加えた点には大いに得るところがあった、と評価していただいたので、松江シンポジウムが日本貿易陶磁研究会の出発に大いに寄与したと記述してくださる方もあった。もっともシンポジウムに参加された約100名の参加者たちによって、日本貿易陶磁研究会を中心に、各地で興った研究会の働きで、貿易陶磁研究と列島の中世史研究が飛躍的に発展したことは特筆される事案であった。

しかし、三上先生はそれ以前からこうした研究体制の確立を模索しておられたのであったと思う。具体的には1978年9月に香港中文大学で開催された「東亜及東南アジア貿易陶磁検討会」に長谷部樂爾・亀井明徳両氏等と共に出席されており、海外情報に疎い日本人研究者の状況を打開するための方策も模索しておられた。それは日本貿易陶磁研究会の第1回研究集会にインドネシアから国立博物館のアブリド氏を、香港から中文大学のジェームス・ワット氏を招聘したことにもうかがえる。さらに、トヨタ財団の支援で若手研究者を東南アジアに派遣し、日本の出土品とは違う貿易陶磁の在り様を学ばせようとされたことにも現れている。研究者の育成と国際交流は、1975年に東京国立博物館が開催した画期的な展覧会、「日本出土の中国陶磁」展で明らかになった諸課題に応えるために喫緊の課題であったものと考える。

発表では、日本貿易陶磁研究会の世話人代表として、テーマの設定や海外交流に係わってこられた三上先生の具体的な動向を紹介し、果たしてこられた業績の一端に触れ、先生が課題として掲げられた1、2の点について触れてみたい。

有楽町一丁目遺跡出土、明暦の大火で罹災した陶磁器群

水　本　和　美

千代田区の有楽町一丁目遺跡（千代田区No.83 遺跡、代田区有楽町一丁目1－2、4号）では、平成25年（2013）4月～8月初旬に発掘調査が実施された。再開発される2000㎡のうち、遺跡が残っていた旧区道部分の488.1㎡を対象とした調査となったが、非常に多くの考古学的な成果が得られた。

有楽町や丸の内一帯の低地部には、縄文海進の名残である日比谷入江があり、家康入府まで存在した。現在の東京駅とJR線山手線が乗る地盤には、この日比谷入江の東を囲う江戸前島と呼ばれる砂州が眠る。家康は、江戸入府後に、この砂州の内側（現千代田区側）にあたる日比谷入り江と外側（現中央区側）を埋め立て、都市「江戸」の建設を進めた。本遺跡では、日比谷入江の形成に関わる地層の確認と、その後の江戸初期の埋め立て層の発見もあった。中世には(1)自然の凹凸の残る青灰色のシルト質の砂地に掘立柱建物が建ち、その後、(2)付近に開けた市場向けに採取されたと考えられる大

量の貝類が廃棄され、さらには、(3)6 体の人骨が埋葬されるなど、中世にも活発な土地利用と各段階の様相が浮かびあがる。

江戸時代に入り、江戸城日比谷御門の付近にある遺跡地は、徳川家の近親者や譜代大名の拝領屋敷となる。拝領者は、①慶長 13 年（1608）以前から、松平家（藤井松平家［土浦→高崎→篠山→明石→大和郡山藩］）が、②延宝 9 年(1681) 3 月から、酒井家［厩橋(前橋)藩］が、③元禄 6 年(1693) 12 月から、青山家［尼崎→飯山→宮津→郡上藩］、④天明 8 年(1788) 4 月から、松平家（奥平家）［上野小幡藩］、⑤寛政 2 年(1790) 6 月から明治初年頃まで牧野家［笠間藩］となっている。

最初の拝領者である松平家（藤井松平家）の時期には、金箔瓦（60 点以上）と黒漆と金色装飾を施した建築部材が確認されており、出土層位とこれらの資料の様相から、元和・寛永期を下限とする建築がこの屋敷内にあったことが想定できるようになった。

さらに、この建築の上にも寛永期以降に別の御殿があったのではないかと考えられ、罹災した建築部材が礎石の上に据えられた状態で確認された。そして、その明暦の大火と想定する焼土層の中から、質の高い陶磁器群が数多く出土した。1630 年代～1650 年代頃の年代幅におさまる、これらの一括資料は、景徳鎮磁器の割合が非常に高く、しかも、接合率が高いために揃いと考えられる碗・皿・鉢類の個体数把握もできそうである。また、景徳鎮の芙蓉手や瑠璃釉、漳洲窯の餅花手などの大皿なども含んでいる。また、古九谷や、中国の色絵磁器にもみるべきものは多い。こうした中には、最近、筆者が分析を行ってきた江戸城跡・明暦大火の罹災一括資料のうち、崇禎期と考える景徳鎮磁器と同様の資料もみられる。

今回は、現在も整理調査中である本遺跡の調査成果の中から、明暦 3 年（1657）年に起きた明暦の大火で罹災したと考えられる一群の陶磁器について報告したい。

草原の陶磁の道

―内陸アジアのモンゴル帝国時代の遺跡出土の中国陶磁―

弓　場　紀　知

1 世紀に始まる草原世界を中心とした「シルクロード」は 8 世紀の唐時代に東西交渉の主要な舞台からは姿を消す。そして 9 世紀以降はインド洋を中心にした海上ルートが東西交渉の舞台となり、東西世界の様々な商品が交易品として船舶で運ばれた。その中の主要品目が東アジアの陶磁器である。とりわけ中国陶磁器はイスラム世界にもてはやされ、さらにはイスラム陶器の誕生と発展を促した。それが三上次男の提唱した「陶磁の道」である。

しかし 9 世紀以降の草原世界はウイグル人、契丹人、モンゴル人、イスラム民族達の商業民族や遊牧民族の活躍する舞台となり、13 世紀初めにはチンギスハーンがモンゴル国を設立し、その子孫達によって東アジアから西アジア、南ロシアにおよぶ連合国家からなる世界帝国「モンゴル帝国」が築かれた。近年杉山正明や松田孝一、森安孝夫ら中央アジア史研究者がモンゴル帝国を中心とする東西交渉史研究を進めている。20 世紀初頭、ロシアの探検家のＰ・コズロフが内モンゴル自治区のカラホト城で 1,500 片あまりの中国陶磁器を発掘した。その後Ｓ・ヘデインもここで元青花磁器や枢府白磁を採集している。1930 年後半、江上波夫はオロンスム城で元時代の陶磁器を発掘し、小山冨士夫もいわゆる満蒙地域出土の 13－14 世紀の中国陶磁器に注目している。戦後中国の考古学者により内モンゴルを中心とした遼一元時代の墳墓や都城址の発掘が行われ、いわゆる草原世界の中国陶磁器が大きな関心がもたれている。カラホト城、集寧路遺跡、燕家梁遺跡、元上都遺跡、さらには新疆省ア

ルマリクなどの元時代の遺跡からは質の高い元時代の陶磁器が大量に出土している。それを「草原世界の陶磁の道」と呼ぶ中国の陶磁学者もいる。

筆者は 2000 年以降カラホト城の調査に参加し、コズロフ発掘のカラホト城出土の 1500 片の中国陶磁器の調査を行った。その組成はいわゆる海上ルートの陶磁器とは異なる内容であった。また 2013 年、モンゴル国カラコルム遺跡出土の陶磁器の調査を行い、カラホト城と共通する傾向をつかむことができた。特に注目したのは鈞窯磁器と孔雀釉陶器である。内モンゴル自治区の元時代遺跡出土の孔雀釉磁器は小山や三上が早くから注目している。孔雀釉陶器はイスラム時代の青釉陶器と同じ釉を用いている低火度釉陶器である。

また 2012 年、ウズベキスタンのテイムール帝国時代の遺跡出土の陶磁器の調査を行った。その調査で 14－15 世紀の中国の青花磁器とその写しともいえる藍絵陶器のいくつかを検出することができた。しかしそれはきわめて少量であり、さらにはその流入ルートはまだ確定できるものではない。しかし中央アジア世界に 14－15 世紀の中国陶磁器が運ばれたことは事実であり、重要である。

今回の発表ではこうした調査の成果と今後の方向性を報告し、「草原世界の陶磁の道」の可能性を考えてみたい。

東南アジアの陶磁の道を学ぶ —1980 年代からの流れ—

坂　井　　隆

東南アジアでは大陸部に独自の陶磁器生産が発展したが、島嶼部では多彩な陶磁貿易が早くから行なわれていた。まず各国での陶磁器研究のエポック的な出来事を概観すると、ほとんどの地域で 90 年代末までに、地元での陶磁史研究進展の基盤は確立されたことは明らかである。

その中で、私が学んできた陶磁貿易史の焦点は次のようだった。

研究を始める契機になったのは、90 年にジャワ島西部のバンテン遺跡へ行ったことである。この遺跡の調査はインドネシアのイスラーム考古学確立の出発点になったが、他の港市遺跡と同様に大量の陶磁片が出土していた。しかし陶磁器考古学教育が基本的にはなされていないインドネシアで、その全体像把握は簡単ではなかった。また高い割合で含まれていた肥前陶磁について、日本ではほとんど知られていなかった。

そこで研究協力組織として青柳洋治先生・大橋康二氏らと共に「バンテン遺跡研究会」を 91 年に結成した。NPO 法人アジア文化財協力協会に組織変更する 2006 年までにインドネシア国立考古学研究センターとの間で、人的交流活動として合同シンポジウム 5 回・日本からのインドネシア遺跡の見学 2 回延べ 11 人・インドネシアからの訪日短期陶磁器研修 7 回延べ 11 人を行なった。また共同事業として陶磁片調査 3 遺跡（バンテン・ラーマ、ソンバ・オプー、ウォリオ）・発掘調査 2 遺跡（ティルタヤサ、ウォリオ）・5 冊の出版活動を実施してきた。NPO になってからも 2011 年からは、トロウラン遺跡での陶磁片調査活動を行なっている。

この間の経験より、陶磁片もその国の文化財であり当該国研究者との協力がなければ十分な調査は望み得ないことを感じる。国際的な信頼関係の樹立が最も重要だが、教育情況の差を簡単に埋めることが難しい中では決して簡単なことではない。

陶磁貿易史研究は、陶磁器研究と完全に同じではない。盗掘資料をどのように考えるかで、岐路に立たされることがしばしばある。しかし盗掘された遺跡の無残な姿を見るたびに、考古学の原則に戻ることを感じさせられる。最低限、明確な発見場所の情報がなければ、歴史資料としては使えない。特に商業サルベージ引揚げの陶磁器には、しばしば学術的に怪しいものが含まれている。テクシン号引揚げ品と称する陶磁器は、その最たる例であ

る。

東南アジアは消費地の島嶼部と生産地の大陸部の特異な陶磁器二重構造になっているため、陶磁貿易史研究はこの地域を理解する大きな役割がある。記録にない驚かされた事実を、私たちは何回も見てきた。バンテン・ラーマでの早期サッファビー白釉藍彩、ティルタヤサでの過半数をしめる高い割合の肥前、ウォリオでのヨーロッパ向け肥前大甕瓶の大量出土、そしてトロウランでの元青花優品と大量のベトナム陶磁などである。

今後も新しい発見は、まだまだ期待できるだろう。しかしそれを可能にするのは、研究者間の交流構築が前提である。陶磁片であっても持ち出しに異議を唱える住民がいることを忘れてはならない。まして組織的な盗掘行為に繋がる蒐集は厳に戒める必要がある。その原則を歩む中で、三上先生が唱えた「陶磁の道」はさらに明らかになると思われる。

アジアーヨーロッパ間の陶磁器流通研究へのアクセス

堀　内　秀　樹

三上次男先生の『陶磁の道』には、「流通」のみならず「消費」の重要性が各所に指摘されている。

ヨーロッパに運ばれた陶磁器類は、宮殿や上流階級の居館あるいは博物館などに伝世している資料から、需要、流通とその文化的背景、それらが誘引したヨーロッパ窯業への影響などが議論された。ヨーロッパのように地震、火災など自然災害が少ない地域では、室内装飾に用いられた陶磁器の多くが破損することなく維持されている例も多く、こうした伝世品の重要性は高い。

一方、考古学的な発掘調査は1990年代頃から、オランダ、イギリスの都市などから開始され、ここから多くの東洋陶磁器が出土している。こうした状況は東洋陶磁器がヨーロッパを市場化したと考えるが、これら出土資料の分析では器種、年代、地域、階層によって異なる様相が確認され、ヨーロッパでのその消費・需要の多様な動態が看取される。これらは各地域や階層の歴史的、地理的、文化的背景の違いとその変化によって起きていると考えている。例えばお茶、チョコレート、コーヒーといった当時の新しい飲習慣に使う道具として、その行為の普及と連動した需要が窺えた。

オランダでは17世紀に東インド会社のカーメルを構成するオランダ海岸部の都市を中心に大型の皿、鉢などが室内装飾、お茶などの飲用器、ドールハウスなど特定の文化的行為の道具として確認されるが、18 世紀には内陸部へと出土地域が広がると共にカップ＆ソーサーの比率が飛躍的に増加している。また、イギリスでは17世紀の出土事例は少なく、18 世紀にはカップ＆ソーサーと共にヨーロッパ風の文様の皿類が多く出土するなどの地域性が確認される。

他方、出島、ホイアン、バタビアなどの中継都市やその途中で沈んだ沈船資料などの流通遺跡も重要な材料であり、消費資料、生産資料との対比からヨーロッパ需要とそれに対応する生産、流通のあり方の解明に繋がる。

ヨーロッパから流入した陶磁器の状況も押さえておきたい。茶の湯には阿蘭陀と分類されるファイアンスの水指、あるいは日本から注文した碗皿類が文書や出土資料から確認できる。また、長崎を中心にファイアンスやストーンウエアが出土し、商品としてもたらされた可能性が高い。幕末になるとイギリスのスタッフォードシャー、オランダのマーストリヒトの製品が都市部のみならず出土例が確認され、江戸後期の外来趣味の中で和食器として受容されていたと推定される。

新大陸に向かう東回りの“陶磁の道”の研究成果と最新情報

野　上　建　紀

古来、東西の文化交流は、陸路であれば中央アジアや西アジア、海路であれば南シナ海やインド洋海域が主舞台となっていた。「陶磁の道」もまた東アジア・東南アジアから、南シナ海やインド洋海域へと西へ運ばれる道がメインルートであった。

そして、大航海時代の到来によって、もう一つの東西交流の道が開かれた。アジアから東へ向かう道である。マニラ・アカプルコ間を結ぶガレオン貿易ルートを通して、東アジアや東南アジアの産物が太平洋を横断してアメリカ大陸にもたらされる一方、ヨーロッパ世界からも西洋の文化がアメリカ大陸に持ち込まれ、東西の文化がこの新大陸で出会うこととなったのである。

ガレオン貿易ルートを通して運ばれたアジアの産物の中には、陶磁器も含まれていた。中でも中国磁器はメキシコの各都市をはじめ、アメリカ西海岸、グアテマラ、パナマ、キューバなど広範囲にわたって出土している。アメリカ大陸からスペインへ向かっていた沈没船からも多くの中国磁器が発見されているので、太平洋と大西洋の二つの大洋を渡って、ヨーロッパに運ばれた中国磁器もあったであろう。

ラテンアメリカで発見される 16 世紀末から 17 世紀前半にかけての資料には、景徳鎮窯の磁器とともに漳州窯系の磁器が一定量見られる。一方、マニラで発見されているスペイン船の沈没船の積荷に数多く含まれているタイやミャンマーなど東南アジア産の陶器壺はまだ出土例が確認されていない。しかし、少なくとも容器としてアメリカ大陸まで運ばれていたと推測されるため、今後、発見される可能性が高い。そして、清朝による海禁政策下の 17 世紀後半には日本磁器が陶磁器貿易の主役となる。まだ出土分布は中米とカリブ海域に限られるが、今後、調査が進めばさらに広い流通圏を確認することができるであろう。海禁が解かれた 18 世紀以降になると景徳鎮窯の染付や色絵が主体となる。徳化窯系については、白磁が見られるものの、染付製品はあまり見られない。そして、18 世紀末か 19 世紀初めには中国磁器そのものが非常に少なくなる。スペイン本国の斜陽、ガレオン貿易の終焉、そして、ヨーロッパから大西洋を経由してヨーロッパ産の磁器が流入するようになったことなどが理由であろう。

そして、アメリカ大陸にもたらされた東洋磁器は、プエブラなどの窯業地に大きな影響を与えている。直接の技術的な影響は認めることができないが、意匠や装飾については、景徳鎮窯の磁器や日本磁器の強い影響をみることができる。また、清朝による海禁によって中国磁器の輸入が激減したことが、プエブラなどの窯業地の生産拡大を促したと考えられる。17 世紀前半においては比較的質の劣る漳州窯系の中国磁器も輸入していたものの、17 世紀後半になると日本磁器の中でも良質な有田磁器に限って輸入するようになるのも、比較的質の劣る磁器についてはプエブラ焼でまかなえるようになったためと推測される。

東アジアにおける水中考古学研究史と近年の沈船調査事例

小　川　光　彦

欧米では 1960 年代以降スクーバ潜水の普及に伴い水中考古学が専門的学問領域として成立してい

く。一方、東アジアでの水中考古学の実践は 1970 年代半ばに日本と韓国で始まる。

【日本】国内における水中発掘調査は、北海道江差沖に沈んだ旧幕府の軍艦「開陽丸」に始まる。1975～84 年にかけて発掘が実施され、船体を残して 3 万点以上の遺物が回収された。1980 年には長崎県鷹島において旧文部省科学研究費による調査が行われ、中国陶磁器やパスパ文字の管軍総把印が元軍の存在を示すものとなり、鷹島南岸は海底遺跡として周知化され、以来港湾改修の緊急調査や分布調査、科研費による調査等が断続的に行われている。水中遺跡分布の把握は 1990・91 年に文化庁により試みられたが、遺跡の詳細までを確認するには至らなかった。アジア水中考古学研究所（福岡）は 2009～11 年に「海の文化遺産総合調査プロジェクト」でアンケート・資料調査・現地踏査・潜水調査を全国で行い、水中文化遺産のデータベースを作成している。現在、行政機関で水中遺跡調査に取り組んでいるのは長崎県と沖縄県である。

【韓国】1975 年発見の新安沖沈船は韓国初の水中文化財発掘となり、海軍の支援を受け翌年より 9 年掛かりの調査が行われた。その間の 1981 年には木浦に保存処理場を整備し、1990 年には海洋遺物保存処理所を開所し、1994 年には国立海洋遺物展示館を開館している。保存処理を終えた船体は復元展示され、2009 年には国立海洋文化財研究所と改称し資料の増加に合わせて展示を更新している。2011 年には忠清南道泰安沖での調査に応じて泰安保存センターが建設され、2016 年の完成予定で木浦の研究所に匹敵する保存・研究・展示施設を準備中である。新安船以降も莞島船・十二東波島船・泰安船・馬島 1 号船等の沈船や群山飛雁島・務安道里浦等の海底遺跡が調査され、高麗時代を中心とする陶磁器研究に多くの一括資料を提示している。さらに陶磁器以外の遺物や文字資料の発見は、積荷や船の性格付けを可能とし、海上交通史や韓国経済史に寄与するところは大きい。

【中国】1985 年に南中国海でトレジャーハンターにより中国青花等が大量に引揚げられ、オークションにて高値で競売された。この事件は国際的な波紋と中国政府に水中考古学調査研究活動の必要性を喚起し、1987 年には中国国家博物館に水下考古研究室（現水下考古研究中心）が置かれ、国際協力により水中考古学専従チームが養成された。共同訓練は水中考古学研究所（京都）の協力により日本でも実施され、1989 年の南海 I 号沈船の予備調査でも合作している。水中考古学従事者の成熟を図った中国は南海 I 号沈船の本格的調査を開始し、2007 年には埋没する船体を周囲の堆積層ごと切取って引揚げている。その船体は広東省海陵島の海のシルクロード博物館の水槽内で保存・公開されるとともに試掘調査が行われている。近年は華光礁 I 号・南澳 I 号・小白礁 I 号沈船を発掘し、1 隻 1 館の勢いで沈船調査と博物館建設を進め、韓国やケニアでも合同調査を行っている。尚、2009 年には水下文化遺産保護センターが設立されている。

日本と韓国で時を同じくして始まった水中遺跡調査は、国の主導の下で遺物と船体の回収、保存・展示施設の建設と組織の充実を進めた韓国と、個人や任意団体を主体に必要に応じて調査体制を繕ってきた日本では、この 40 年間における組織の構築と調査の実践・成果において大きな開きが生じている。10 年後発の中国においても長大な沿岸部の分布調査を国家博と各省で実施し、さらに“陶磁の道”を追ってパラセル諸島や東アフリカでも活動を推進している。

東洋陶磁学会：
〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-5-6　りそな九段ビル 5F　KS フロア
TEL. /FAX. 03-3239-1277　　http://homepage3.nifty.com/toyotoji